

平成元年度

精神発達遅滞児の心理状態についての研究

～バウム・テストと動的家族描画を通して～

川崎市総合教育センター 障害児教育II研究会議

精神発達遅滞児の心理状態についての研究 ～バウム・テストと動的家族描画を通して～

障害児教育Ⅱ研究会議

原田 道子¹ 片山 世紀雄²

要 約

養護学校（精神発達遅滞児）高等部の生徒の日常生活を観察していると、対人関係においても不適切と思われる行動を示す場合が少なくない。彼らのこのような行動を示す際の心理状態を理解するためには、さまざまな方法が考えられるが、本研究は精神発達遅滞児の自己表現のひとつである描画を通して、その心理状態を理解することとした。

精神発達遅滞児の自己像が投影されると考えられるバウム・テストと、家族関係の中で自分を投影すると考えられる動的家族描画を検討した。この2つの描画を養護学校（精神発達遅滞児）高等部の生徒97人に描画を実施し、チェックリストによる整理分析・事例研究を行った。

バウム・テストでは、健常児に比べ表出力は弱い、自信が持てず、感受性が強く内向的になり、自分のエネルギーを十分発揮できず不安定になっている状態や、成功したい気持ちや投影された。動的家族描画でも、健常児に比べ表出力は弱い、父母との結びつきの強さ、自分自身、父母についての葛藤など家族に対する微妙な思いが投影され、精神発達遅滞児にとっての、2つの描画の有効性が確認された。

キーワード：精神発達遅滞児，描画，バウム・テスト，動的家族描画

目 次

はじめに	182		
I 主題設定の理由	182	1 チェックリストによる描画の特徴と傾向	185
II 研究のねらい	183	2 事例	195
III 研究の内容と方法	183	V まとめと今後の課題	198
1 研究の内容	183	おわりに	199
2 研究の方法	185	参考文献・指導助言者	200
IV 結果と考察	185		

¹) 川崎市立養護学校教諭（主任研修員）

²) 川崎市総合教育センター指導主事

はじめに

養護学校高等部には、養護学校中等部、中学校障害児学級、中学校の通常の学級からの生徒が入学してくる。高等部入学当初は表情も硬く、下向きかげんの姿勢で、いかにも自信のなさそうな態度をとっている生徒が多く見られる。しかし、日を重ねるにつれ、クラスのメンバーに馴染み、教師に対しても警戒するような態度がなくなり、多弁になってくる。養護学校という場がわかって、それぞれが自己を発揮しはじめる。ある生徒はリーダーとして活躍し、卒業後一般企業に就職していく生徒もいる。授産場や作業所にいく生徒もある。

しかし、卒業後、思わぬ展開をみせる卒業生がいる。学習を積み重ねたとはいえ、実社会につまづくことがある。在学中に生徒の状態を的確に把握していなかったのでは、という思いが残る。

精神発達遅滞児の指導法については、今日多くの研究物が出版されている。しかし心の問題がとりあげられていることは少ない。通常の学級でも、いわゆる登校拒否をしている子どもの問題提起から今、心の問題が注目を浴びている。精神発達遅滞児についてもその心理状態を的確に把握をし、社会参加に向けてきめ細かく指導していく必要があると考える。

I 主題設定の理由

精神発達遅滞児を指導する場合、一人ひとりの状態に応じた課題が設定され、学習計画が作成することが求められる。しかし実際の指導場面では、状況に応じた係わりが求められることが多く、ややもすると指導が試行錯誤的になりやすい。又、精神発達遅滞児が不適切と思われる行動を示した場合、その原因が、学校における対人関係によるものか、家庭に於ける人間関係に起因するものか、又他の要因によるものかが極めて理解しにくい。さらに、精神発達遅滞児は生活上、様々な障害にぶつかることが多いが、そのような場合、他人に援助を求めたり、相談したりすることは少なく、又自分で解決していく力が弱いために心理的に不安定になりやすい。そのため、不適切と思われる行動という形で表現することも少なくない。このような精神発達遅滞児の行動を理解していくためには、この心理状態を理解していく必要がある。

人間の心理状態を明らかにしていくものとして、心理学者はいくつかの方法を確立してきた。教育相談の場でも様々な方法が試みられている。しかし、残念なことに、これまでに研究された多くの方法は、精神発達遅滞児に適用しにくい。それは、多くの実施上の言語指示が複雑になっているためである。しかし人物画テストや箱庭づくりなどは、精神発達遅滞児にとっても、自然なかたちで自分の心情を表出することができると考えられる。描画テストの一部には比較的簡単に応答できるものがある。そこで精神発達遅滞児の心理状態を明らかにしていくために、精神発達遅滞児について描画テストを実施し、その特徴と有効性を探る。

この研究は、描画テストの中でも、精神発達遅滞児自身の心理状態が投影されると考えられる“バウム・テスト”と、精神発達遅滞児に大きく影響を与える家族を、彼がどう捉えているかが投影されると考えられる“動的家族画”を実施することを通して、精神発達遅滞児の心理状態をより明らかにしていこうとするものである。また、本来的には、テストはテストのためのものではなく、係わりの中で実施され、対象者を理解していくてだての一つとして実施されるものであるが、今回

はその前段階と考える。

II 研究のねらい

- 精神発達遅滞児のバウム・テストの特徴と有効性
- 精神発達遅滞児の動的家族画の特徴と有効性

III 研究の内容と方法

1. 研究の内容

(1) 描 画

生徒達の表現には様々なかたちがある。最も簡単なレベルでは、楽しい時にとても良い表情をしたり、スキップして廻ったりというような身体的な表現がある。言葉を使った表現では「パン」（パンちょうだい）「あし いたい。」（足が痛い。助けて）「〇〇さんと遊んで楽しかった。」というように、成長に伴い言語表現は豊かになってくる。「メーリさんのひつじ、メーメーひつじ楽しいな。」というように楽しい気持ちを歌ったり、オルガンで演奏したりする音楽表現もある。描画もこれらの表現方法の一つである。

描画という表現は、表現の中で占める割合は少ないかもしれない。しかし、幼児が所構わずクレヨンでいたずら書き（？）を夢中になってしているのを見ることがある。自分の思いをどんどん表現しているので楽しくてしょうがないのであろう。美術教育の中でも、絵は、描く者の思想や感情の表出であり、描くことを通して、自己の内面を深めていくことができる、とされている。この基本が絵画療法につながってくるのである。それは描画には描き手が考えもしなかったことが表出され、また、表出されることにより、それが描き手に意味を持ってくる、ということであろう。

しかし、精神発達遅滞児の養護学校で描画を授業で取り上げる時、教師は、なぐりがきレベルの生徒の腕を取って円を描かせてみたり、口のない人物に、口がないのはおかしい、という教師の思いで口を描かせてしまうということも、よくしがちである。もちろん、このようなことを指導することも必要な場合もある。しかし、それだけでは描画が生徒自身の思いや感情とは離れてしまうわけであるから、描画のもつ本来の意味はなくなってしまう。生徒の中には自分は下手な絵しか描けないから、と絵を描かない生徒が年度始めには毎年何人かはいる。

描画が本来的な描画であるためには、描き手と教師との関係、その時の場の設定等が大事な要素となることを忘れてはならない。このことは、描画テストの実施にあたって忘れてはならないことである。生徒が自由に描けるよう十分配慮していかなければならないが、基本的に描画という表現は、直接的に人間の日常的な感情や意識下の状態が表現されやすく、精神発達遅滞児においても同様であると考えられる。

(2) バウム・テスト

バウム・テストは描画テストの一つである。C. コッホが1949年ドイツ語で「バウム・テスト——精神診断学的補助手段としての樹木画テスト」として公刊したことにはじまる。日本で初めて注目され、研究されたのは1961年である。現在はA4サイズの画用紙に4Bの鉛筆で「実なる木を一本かいてください」という指示で描かせる方法をとっていることが多い。

”樹木画に表現されるものは、真の外観ではなく、むしろ、内にあるものの分泌物であり、内なるものの外に向かう動きであって、まさに人間に似てはいるが、その内部存在においては性質を異にするような形態をなしている。それは心の”投影であり、現れてくるものは、正確にいうと、”顔”ではない。木の法則は内なるものを外に押し出すことであり、人間の心がその法則に従うのである。”⁽¹⁾と、C. コッホがヘルマン・ヒルトブルンナーの言葉を引用しながら述べているように、樹木画は木の法則に従って人間の外観でなく、心が表れてくると考えられる。しかし、それは、ただ単に心から素材を引き出し明らかにするだけではないということである。又、どのテストにも言えることであるが、樹木画は描き手の全てが表現されるということではない。描き手の内面のさまざまな局面がテストというフィルターを通して投影されるのであって、それぞれの局面の反応は一律ではない。従って、結果の解釈に当たっては部分だけにとらわれることなく、常に全体とのからみで解釈することが大切である。

精神発達遅滞児自身の心理状態も、バウム・テストにより表出されると考えられる。バウム・テストを養護学校高等部の精神発達遅滞児に実施し、その特徴と有効性を検証する。

(3) 動的家族描画法 (K-F-D)

動的家族描画法はバーンズとカウフマンが1970年に確立したことに始まる。この手法は、日本においては日比裕泰が、児童臨床における家族治療との関連において1973年にはじめて紹介した方法である。A4サイズの画用紙に4Bの鉛筆で「あなたを含めて、あなたの家族のみんなについて、何かしているところを絵に描いてください。漫画や棒のような人ではなく完全な人を描いてください。何か——つまり、何らかの行為をしている、そういうみんなを描くということを忘れてはいけません。あなた自身も描くということを忘れないでください。」という指示で、あとは特に制限をつけず描かせる方法をとっている。

“家庭は、個人がその成長発達の過程において最初に出会う“社会”であり、後の社会的態度の基本的特性が形成される場である。”⁽²⁾そして、動的家族描画はその家庭で“その被験者が、日常、意識的にも無意識的にも彼自身の立場から、自身を含んだ家族関係をとらえている、その認知的構図の転写されたものと考えられるのである。”⁽²⁾と日比は述べている。

家庭については家庭訪問や個人資料によって判る部分がある。しかし、その家庭の中で彼が家族をどう受け止めているかを理解することは難しく、K-F-Dに期待するところが大きい。ただ単純に家族が横に並んでいるような動きのない描画よりも、家族が何かの動作をしているところを求めた描画のほうが、より、その家族に対する感情が現れやすい。様々な家族の日常生活の中から一つの動作が選ばれたということは、彼自身の主観的判断が働いているからである。それは、その家族に対する主観的判断に外ならない。彼自身は、この主観的判断をしながら生活しているのである。客観的事実より主観的事実の方が彼の行動に影響を与えるのである。

以上のことは精神発達遅滞児においても同様なことが考えられる。勿論バウム・テストと同様に描画が全てではなく、他の資料との関連で解釈していくこと、又描き手と描かず側の関係等も大き

(1) C. コッホ「バウム・テスト」日本文化科学社、1970年、5ページ

(2) 日比裕泰「動的家族描画法」ナカニシヤ出版、1986年、32-33ページ

く影響していくことも忘れてはならないことである。K-F-Dを養護学校高等部の精神発達遅滞児に実施し、その特徴と有効性を検証する。

2. 研究の方法

まず、事前にバウム・テスト・動的家族描画を標準の方法で実施し、指示の仕方などを検討した。その結果、バウム・テスト・動的家族描画を標準の方法で実施することとした。

(1) 対象者

- ・学年 養護学校高等部1年-49人 2年-32人 3年-16人 計97人
- ・性別 男子-61人 女子-36人
- ・知能分布（全訂版田研・田中ビネー知能検査）
算出不能-2人 IQ20~49-50人 IQ50~74-39人 IQ75~84-39人 平均IQ49
- ・主な障害 ダウン症-8人 癲癇-11人 自閉的傾向-15人
- ・出身校 通常級-11人 障害児学級-64人 養護学校-21人 定時制高校中退-1人
- ・その他 母子家庭-19人 父子家庭-6人 施設入所-2人

(2) 描画実施法 集団による描画（バウム・テスト、動的家族描画）の実施

(3) その他個別資料の収集

(4) 分析方法

- ・得点カテゴリー……「バウム・テスト整理表」「K-F-D分析表」を参考にする。
- ・得点化……意味不明な描画については除く。
- ・単純集計・クロス集計で全体的傾向を把握、多変量分析した。

(5) 描画を中心とした事例研究

IV 結果と考察

1. 描画指標による全体的特徴（量的分析）

バウム・テストと動的家族描画について、用意したカテゴリーを用いて、各描画ごとに該当-非該当に従って1-0の得点を与えた。これらのカテゴリーについて一次集計した後に、知能の段階などによってクロス集計をした。これによって精神発達遅滞児の描画特徴を把握した。

以下に、バウム・テスト、動的家族描画の各カテゴリーごとにその分析結果を記す。

(1) バウム・テストでの特徴

「木」又は「リンゴの木」という課題提示に、びっくりしたような様子が見られ、戸惑いが感じられた。木を観察したり描いたりしたことのない生徒が多かったのかもしれない。「き」と言われて「木」を連想できなかった生徒も多く、結果的には「リンゴの木を1本描いて下さい。」と言う提示をしたことも多くあった。又、「リンゴの木」と提示されても、知的レベルの低い生徒には、リンゴの実のみを描いたりする例も見られた。

しかし、何回となく描いては消し、消しては描くという生徒や、50分も時間をかけた生徒もいたが、当日欠席していた生徒以外はほぼ全員が描くことができた。

①描き方の全体的特徴を示すカテゴリーによる分析

ア. 「描き直し」（表1）

描き直しをしているのは、生徒の約6割、知的レベルで中程度(IQ50～74)の生徒だけで見ると約7割に達する。このことを、コッホの解釈に従うと、自信が持てない毎日を過ごしている様子が窺え、とりわけ知的レベルが、中程度の生徒がより自信がないようである。

イ. 強調 (表2)

木の冠と幹のどちらを強調して描いているかを強調という。外界への関心の高まりを象徴する冠強調は生徒の1割に満たず、幹強調を示すものが多い。IQ50以上では冠強調は1人しか見られず、知能の高さが失敗経験をマイナスに向かわせることがあると解される。

ウ. 傾斜 (表3)

左右強調については右が1割弱、左が2割弱であったが木の傾斜については約2割が右傾斜している。感受性が強く、良い意味では、彼らの優しさが表れているように思われる。

エ. 空間利用 (表4)

表4 空間利用

合計	はみだし	領域1	領域2	領域3	領域4
100.7人 0%	25.18人 4%	29.21人 6%	26.18人 8%	15.11人 5%	76.54人 1%
領域5	領域6	領域7	領域8	領域9	
9.65人 5%	7.50人 4%	26.19人 8%	28.20人 2%	21.15人 1%	

空間利用は画用紙を9分割し、その領域の使用(5割以上)をチェックしたものである。領域4・5・6は画用紙の中央であるので木はほぼ中央に描かれていることが想定されるが、領域6が7割、領域5が9割ということは、宙に浮いた不安定さを感じられる。又“はみだし”が2割強あり、この大部分は知的に高いレベルの生徒である。エネルギーはあるが、自分の与えられた空間に収まり切れず、ともすると逸脱行動を示しやすいことが予想される。その他知的レベルによって使われた領域に差がみられたのは、2・4・8領域である。低いレベル(IQ50以下)の生徒はこの部分にも描いているが、高いレベル(IQ50以上)の生徒はあまりこの部分には描いていない。はみだしが多い一方で、樹冠が描かれる部分の画面いっぱい描かなかったということは、高いレベルの生徒が外界に係わっていかず、エネルギーが逸脱という方向で出やすい、という心理的特徴の一部が示されたように思われる。

②描画の各部分ごとの特徴

表1 描き直し

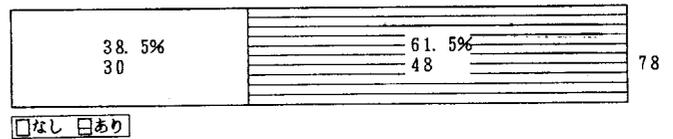


表2 強調

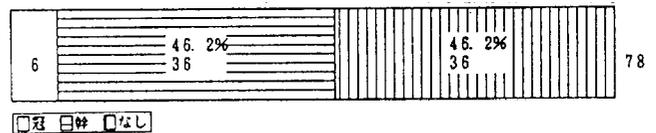
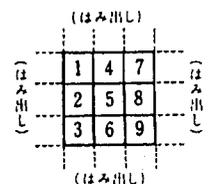
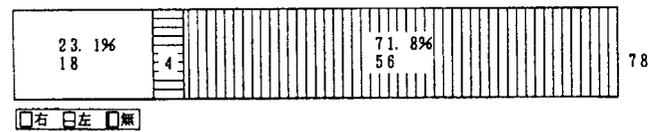


表3 傾斜



ア. 風景・付属物・地平

風景等は殆ど描かれなかった。地平線も同様である。紙端が地面を意味しているものと思われるが、黒く塗りつぶしたり、こだわるようにエネルギーを傾けている生徒がいた。自分の基盤が不安定なことが想定される。

イ. 幹の基部 (表5)

幹の基部は紙下縁立(紙の下端から幹が立ち上がっている)が約3割、幹下直(幹の下が直線で下端が角張っている)・広い基部(それぞれ約1割)である。この3点は精神発達遅滞児に多く見られると言われているが、今回の結果でも1, 2, 3位を占めた。紙下縁立は、5, 6歳児レベルに多く見られると言われているが、知的レベルが高い生徒(IQ50以上)にも見られた。その他、低い生徒(IQ50以下)には幼児型・右膨らみが多く、高い生徒には広い基部・普通の割合が高く見られ幼児型・右膨らみは無くなる。

表5 幹の基部と知能

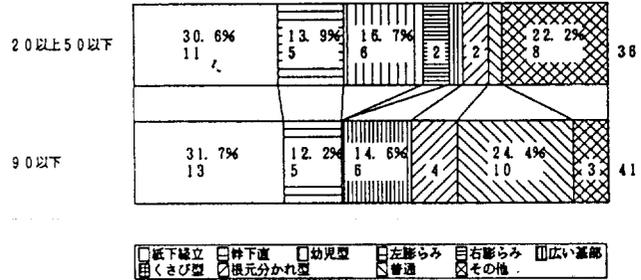


表6 幹の位置Aと知能

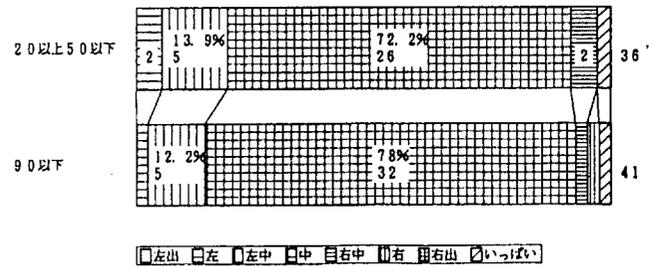


表7 幹の位置Bと知能

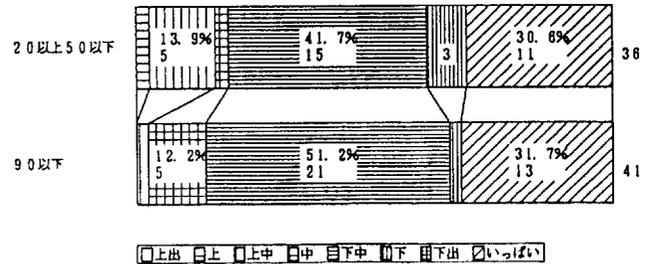
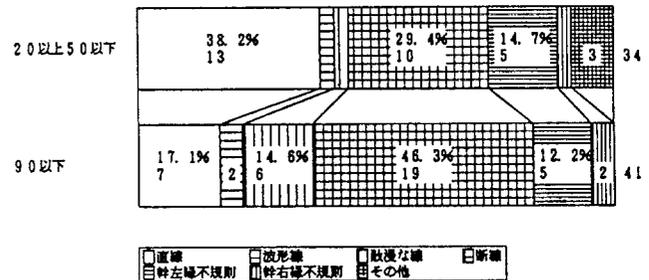


表8 幹の輪郭と知能



ウ. 根 - 3例しか描かれなかった。

エ. 幹

幹は2線で描かれることが多いが直線よりも、断線で描かれることの方が多かった。伸びやかな線が引けず、神経質になっているような様子がうかがえる。

幹の位置(表6)は下中段に描かれているものが多いが、上中下といっぱいに描かれているものが約3割あり、これらは冠が殆どないことが想定される。高い生徒(IQ50以上)には上部に幹を描いた生徒が殆どいないが、低い生徒(IQ50以下)には中を含め約2割いる。低い生徒の方が不安定な状態が多いと思われる。

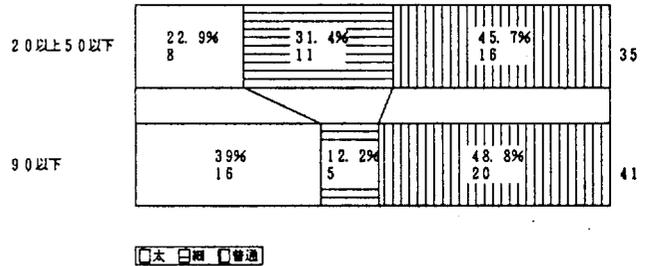
幹の位置(表7)の左右については約8割が中央で、右よりも左の方が多く、内向的傾向が見ら

れた。

幹の輪郭（表8）では左縁が不規則なものが多く、散漫な線で描かれたものが約1割あり内的な弱さ、感受性の強さも感じられた。

幹の太さ（表9）では指3本以上の太いものが3割くらい、指1本以下の細いものが2割くらいあった。しかし、低い生徒では太いもの約2割細いもの約3割、高い生徒では太いもの約4割細いもの約1割であった。低い生徒は萎縮しやすく、高い生徒は反対に自我肥大になりやすい傾向が感じられる。

表9 幹の太さと知能



幹の経過（表10）を見ていくと、上開放・ふくらみが各約3割、先太・くびれが各約2割である。開放は開けっぴろげであるとも考えられるが、いろいろな場面での対応が困難であることが多く、問題を未解決のまま放っておきやすい傾向も考えられる。（描いている時も、2本の線をどう処理していこうかと迷っていて、そのままにしたり枝や冠で曖昧にしてみた例も見られた。）ふくらみ・先太・くびれ等は、根元からのエネルギーがいろいろな障害により順調に出して行けずにいると考えられる。枝ではなく幹という根幹の部分でこのような状況にあるということに心理的問題の重さが感じられる。

表10 幹の経過

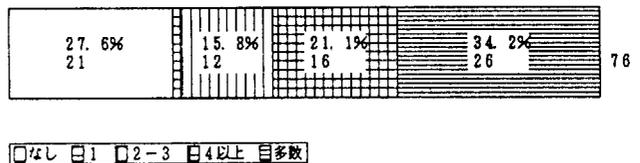
合計	ふくらみ	くびれ	先太
100.0% (53人)	32.1% (17人)	22.6% (12人)	24.5% (13人)
上開放	上下開放	さまよい	その他
34.8% (18人)	9.4% (5人)	-	34.8% (18人)

オ. 枝

・枝の数（表11）

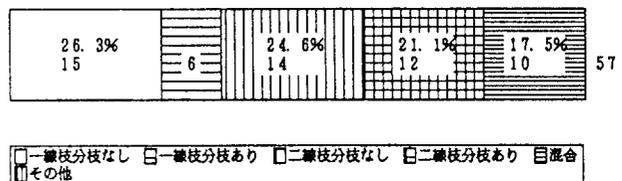
枝が全く描かれていないものが3割弱あった。3本以下のものも2割弱である。知的レベルの低い生徒は枝を余り描いていないが、高い生徒は4本以上描いているものが多い。

表11 枝の数



しかし、枝の無いものは高い生徒にも低い生徒にも見られた。

表12 枝の構成



・分枝（枝からさらに枝分かれた枝表12）は少なく、約5割が分枝なしである。幹の部分でエネルギーが

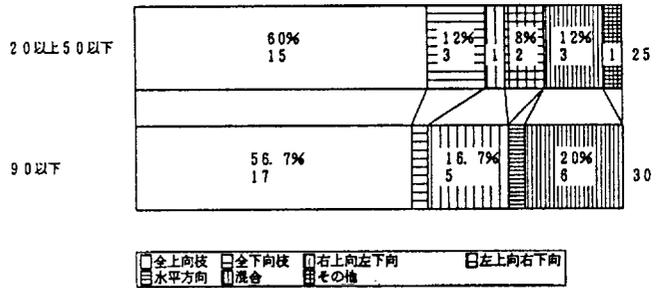
停滞したり、噴出したりしているために、エネルギーが枝までまわらずさらに豊かに枝・葉を茂らせていくようになっていかないということであろうか。

・枝の経過（表13）

描かれた枝の約6割は全部上向きであるが、下向きの枝を描いているのが約2割になる。高い生徒では枝を全部下向きに描いているものは少ないが、右上向左下向・水平方向が低い生徒に比して多い。高い生徒は周囲にいろいろ係

わろうとするが、やはり自信がないという状態が見られる。枝を細かく見ていくと、自閉的な生徒に多く見られる紋切り型（パターン化した枝葉）3割強、枝の先が開いているもの約2割、刃型（刀のような形のもの）・尖状型が計3割強となっている。枝先が開いているものは、幹が開放と同じような意味あいがあると考えられる。刃型・尖状型は他人や世の中に対して敵意を感じている場合などに描かれることが多く、描いた生徒の心理的状態の不全感を感じる。

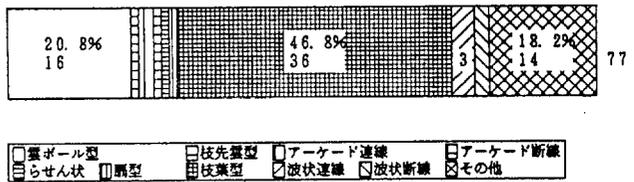
表 13 枝の経過と知能



カ. 樹冠 (表14)

樹冠は外界への係わりがよく示される。特に輪郭は、自分が外界をどう受けとり表現していくかが示されることが多い。枝葉型・雲ボール型が殆どである。枝葉型は環境に対する態度が積極的になって

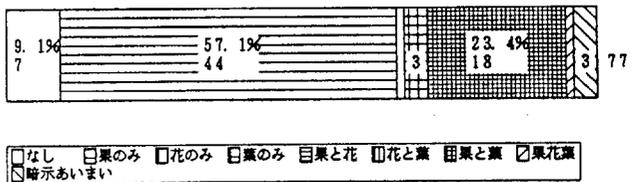
表 14 冠輪郭



いるとも考えられるが、枝や葉の数は少なく活発さに欠けるものが多い。雲ボール型は大きさにもよるが、単純であり、手足を縮めてこじんまりしてしまったようなものも見られた。

キ. 果・花・葉 (表15)

表 15 果・花・葉



果実のみを描いている生徒が6割に近く、果実と葉を描いている生徒は2割強である。木を描かずリンゴだけを描いた生徒もいたが、果実は利益、目標、結果を意味し、葉も描かずに短絡的に結果を

求めている生徒が多く見られた。果実の代わりにお金を描いた生徒、1本の木にいろいろな果実を描いた生徒もいたが、成功したい、認められたいという気持ちが伝わってくるようである。

果・花・葉所見 (表16) の描き方について見ると、樹冠の中に枝がなく、果実だけが浮いているように描かれたものが4割近い。又、空間倒置 (果実が上向きについている) という重力を無視し

表 16 果・花・葉所見

合計	空間倒置A	空間倒置B	空間倒置C	常同	重複	落葉落下浮遊
100. 57人	7. 4人	24. 14人	—	21. 12人	3. 5人	8. 5人
19. 3%	38. 22人	10. 6人	22. 13人	5. 3人	1. 1人	

たような描き方が約3割、果実等を黒く塗ってエネルギーを傾けているような描き方、常同というパターン化されたような描き方がそれぞれ約2割、落ちる実・落ちた実を描いた生徒も2割強あった。落ちる実は喪失感や感情のデリケートさを意味するものと考えられることが多く、描いた生徒については配慮が必要と思われる。冠中浮遊果（樹冠に枝が無く果実が浮いているように描かれる）は、通常10歳までの子どもによく見られる描き方であるが、知的レベルの高い生徒・低い生徒の両方に見られた。

(3) 動的家族描画

“家族の絵”というところで、描くことに戸惑いが見られた生徒がいた。集団で実施したこともあったと思われるが、描くことに抵抗をみせ描かなかった生徒がバウム・テストより多く見られた「家族全員が何かをしているところ」という指示に対しても「全員で食事することもないし・・・」という呟きが聞こえ、どういう場面を描くかあれこれ迷っている生徒が多く見られた。しかし反面、人物という描き慣れたものであったせいか、バウム・テストでは何を描いているのか判断ができにくかった生徒でも、顔だけであったりはしたが描かれた人物が判り、「これはだれ？」と質問すると「おとうさん」というように、ニコニコ顔で説明した生徒もいた。

描かなかった生徒には描くことへの抵抗というより、家族に対する抵抗が感じられ、家族を描くことを省略せざるを得なかったと思われる生徒も見られた。

①全体的構成（表17）

家族の誰かに抵抗を持ったり、不安感があると、その家族を線で区切ったり、囲んだり、下線を引いたりすることがある。そのあらわれがスタイルとなって表現される。

スタイルA；画面を線で区切って、家族それぞれの間に築かれた感情を切り離そうとしていることを示すことが多い。

スタイルB；画用紙の縁に人物を描くことにより、自分を防衛するスタイルである。

スタイルC；その人物に対して不安や恐れのある時その人をカプセルに詰めたように囲ってしまう。

スタイルD；画用紙をいくつか折ってその中に個々の人物を描き入れる。強い不安や恐れを持った人に現れやすい。

スタイルE；画用紙の下部に線を引くもので、家庭内に不安感がある時、底辺に線を引き安定を維持していかうとするものである。

スタイルF；画用紙の上部に線を引くもので、激しい不安をもっている場合に現れやすい。

スタイルG；個々の人物像に下線を引くもので、特定の人物に不安定感をもっている時にその人物像の下に線が引かれる。

スタイルH；A～G迄のどのスタイルでもないもので、家族に対する気持ちを普通に現したものである。

表17 全体的構成

合計	スタイルA	スタイルB	スタイルC	スタイルD	スタイルE	スタイルF	スタイルG	スタイルH
100.0%	14.1%	2.2%	6.9%	—	7.3%	2.2%	—	70.6%

スタイルHは約7割で、大部分の生徒はごく自然に家族を表現している。社会的に孤立した人に

典型的に現れやすいと言われるスタイルAは1割強である。その他スタイルB, C, E, Fなどが見られた。

家庭状況を見ると父子家庭の生徒は全員がスタイルHであったが、母子家庭の生徒はいろいろなスタイルをとっているものが見られた。

知的レベルでは中程度(IQ50以上75以下)にA~Gのスタイルが多く見られた。スタイルH以外のスタイルを取った生徒については特に配慮が必要と思われる。

全体的に見ると自然に描いている生徒が多かったが、社会的に孤立しやすいという傾向も見られた。

②描かれた事物(表18)

テーブル・テレビ・こたつ等家族団欒の家具と食物・食器が多く描かれた。食事場面を描いた生徒が多かったためと思われる。暖かな家庭とも見えるが、食べることに對する不安が感じられるものがあつた。関連して描かれていた流しは、そのような食欲求が満たされない場合に描かれることが多いと言われる。

表18 描かれた事物

合計	テレビ	テーブル	こたつ	机	流し	戸	食物
100.0%	30.1%	33.3%	11.7%	8.3%	8.3%	16.1%	26.1%
布団	食器						
8.3%	30.1%						

机・布団などは個人用であることから、自然な形で家族を分けていたり囲んでいると考えられる。机に向かつて背を向けた人物は孤独さを強調しているように考えられる。

日比裕康の女子短大生に実施した描画(1985年)⁽³⁾においても、描かれた事物を多い順にあげると“こたつ、テレビ、食器、エプロン、食物~テーブル”であり、今回の調査とあまり差がない。しかし、描写された事物の数は少ないということが精神発達遅滞児の特徴と考えられる。このことは精神発達遅滞児の家庭生活の偏り(精神的にも)が想像される。しかし日比裕康の行動障害群情動障害、登校拒否、精神障害、非行)の描画特徴(1982年)⁽³⁾の結果(机、台所・流し、テレビ、椅子、布団・枕~の順位)とは明らかに異なっている。

③家族の活動内容(表19)

描画したあとに描かれた人物について何をしているところか説明させ、まとめたものである。自分・父・母とも食事をしている場面が最も多い。

自分の活動は“立っている”という防衛的な内容を除くと“食事、テレビ、遊び、寝る、会話、勉強”である。しかし“寝ている”という内容を描いた生徒は描かれた事物の所でも少し述べたように家族との係わりを拒否しているように考えられる。

母親の活動でも“立っている”というような防衛的な内容を除くと“食事、テレビ、寝る、会話、料理”であり、これも“寝る”以外はごく普通である。

父親の活動でも“立っている”というような防衛的な内容を除くと“食事、寝る、テレビ、会話、

(3) 日比裕康『動的家族描画法』ナカニシヤ出版、1986年、170ページ、144ページ

遊ぶ”となっている。父親を描かなかった生徒がいたこともあり、総数が少ないが“寝る”が2番目に多く見られた。

全体的に見て、描かれた人物の活動は一般的な活動内容と言えるが、“寝ている”という内容を描いた生徒が約1割近くいたことは家族とうまく関係が持ちにくい状態であることが推測され、しかも自分自身も寝ており、退行的になっているようにも考えられる。又、“立っている”と言う場面を描いた生徒には、描きたくなかったが、仕方無く描いたことが明らかな生徒もいた。描かせる側との関係、描かせた場面の問題もあったと思われたが、防衛的になりやすいといわれる精神発達遅滞児の難しさもあると思われる。

④個々の人物の特徴

・高くあげた人物(表20) ;画用紙の上部に描かれた人物

父親が上部に描かれたものが4割強で1番多く、次に母親、自分となるがほぼ4割である。父母が家庭のリーダーシップを取っているということは妥当であり、次に自分を上げているのは支配欲の現れであろう。他の兄弟姉妹に比して、妹が約2割と高いのは、妹が“めんどうをみてあげる”というような態度で命令をしたりすることが多いとも考えられるが、微妙な兄弟姉妹関係が反映しているものと考えられる。

この中には、家族全員を高くあげたものもあるが、これは、家族について不安定な状況にあることの反映と考えられる。

・消した人物像(表21) ;消しゴムで消して描き直している人物

消した人物では自分が約6割父親が各約4割となっている。他の兄弟姉妹についても2割前後である。自分については半分以上も描けないということは家庭においての自分が定まっておらず葛藤が起

表 19

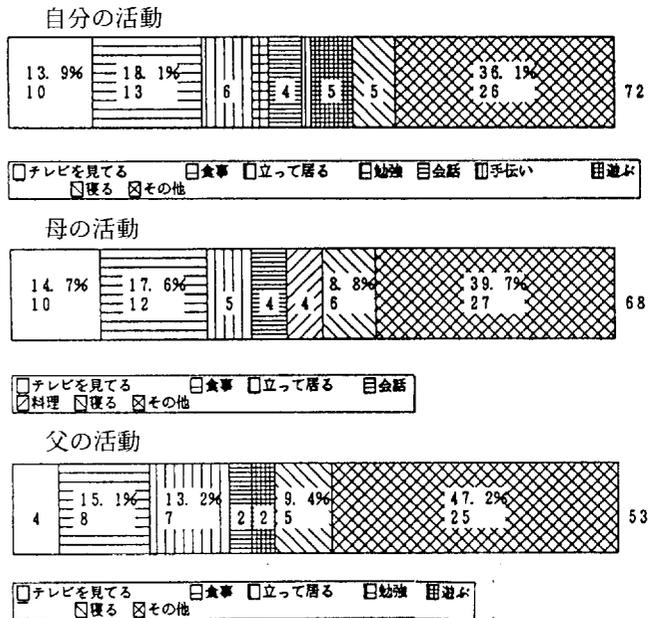


表 20 高くあげた人物

合計	自分	父	母	兄
100.0%	39.1%	45.2%	43.5%	4.2%
人数	28	21	20	2
姉	弟	妹	その他	
13.6%	10.5%	19.8%	6.5%	
人数	8	5	9	3

表 21 消した人物像

合計	自分	父	母	兄
100.0%	60.4%	41.5%	43.4%	18.9%
人数	53	32	23	10
姉	弟	妹	その他	
17.0%	20.1%	13.7%	3.8%	
人数	9	11	7	2

こっていることと推測される。父母についても同様で、色々な感情が沸き起こっているものと考えられる。知的レベルでの中程度 (IQ50~75) の生徒に自分、父母ともに描き直しが多く、葛藤の強さが感じられた。

表22 後ろ向きの人物像

・後ろ向きの人物像 (表22)

後ろ向きに描かれた人物は約1割である。そのうち自分、母親ともに約5割である。このことはその人物に否定的になっていると考えられる。

合計	自分	父	母	兄
100.12%	50.6%	16.7%	50.6%	25.3%
姉	弟	妹	その他	
8.3%	8.3%	33.3%	二	

・省略した人物像 (表23) ; 描かれずに省略されてしまった人物

その人物に対する拒否的な気持が描かないということに繋がったと考えられる。父親、自分が多い。父親が子どもの養育に携わっていない、関係のない存在になってしまっていることの表現であろうか。

表23 省略した人物像

時間的にも接することの少ない父親との差が反映されているとも考えられる。自分の省略は知的レベルの低い生徒 (IQ50以下) に多く見られ、自我の未発達や否定されることの多いことが考えられる。

合計	自分	父	母	兄
100.36%	41.7%	44.4%	30.1%	25.0%
姉	弟	妹	その他	
19.4%	16.9%	8.3%	11.4%	

表24 身体部分の省略のある人物像

・身体部分の省略のある人物像

(表24) ; 身体部分の省略でその人物に対する葛藤を示していると考えられる。

合計	自分	父	母	兄
100.76%	77.5%	55.4%	78.6%	21.1%
姉	弟	妹	その他	
26.2%	13.1%	17.1%	11.8%	

表25 省略された身体部位

母親、自分の約8割、父親の6割弱に身体部分の省略が見られる。

省略はとても多い。父母に省略が多いことから親子関係の複雑な様相が感じられた。

・省略された身体部位 (表25)

その部分の機能の否定を示唆すると言われる。耳の省略が多く見られた。聞きたくないことが多く、省略されたのであろうか。精神発達遅滞児は禁止や命令の指示を受けることが多く、指示を拒否したくなるようなことが多いのかもしれない。

合計	耳	手	足	口	目
100.79%	75.6%	27.2%	45.3%	17.1%	3.8%
鼻	その他				
10.1%	58.2%				

⑤人物像の高さ

描かれた人物像の大きさをmm単位で測ったものである。

・自分の高さ (表26)

生徒の半数は5~10cm位で自分を描いている。父母の大きさに比べると小さく描かれているが、

5 cm 以下のものが約2割で、特に自分を小さく描いているということではないようである。知的レベルで見ると、高いレベル (IQ50以上) の生徒が自分を小さく描いている傾向が見られる。逆に15cm 以上の大きなものは高い生徒には殆ど見られない。

・父母の高さ (表27, 28)

約3割の生徒が父母を5 cm ~10 cm ぐらいで描いている。15cm 以上に描いたものは自分より多く、父母に対する関心の強さが示されているが、母親は5 cm 以下に描かれているものが多く約2割強あることも注目し得る。父親は描画の中から省略されることも多いが、家族として位置づけられた父親は知的レベルの高い生徒において10 cm 以上に描かれたものが3割強で母親の2割弱と比べると多くなる。父母に対する微妙な関係の違いが表現されているようであるが、全体的に見ると知的レベルの高い生徒は父母についても小さく描く傾向が見られた。

・大きさの比較 (表29)

父最高1；自分<母<父
 父最高2；母<自分<父
 母最高1；自分<父<母
 母最高2；父<自分<母
 自最高1；母<父<自分
 自最高2；父<母<自分
 自分、父、母の大きさを全体的に見て比較すると自分を最大に描く生徒が4割弱、母

表 26 自分の高さ と 知能

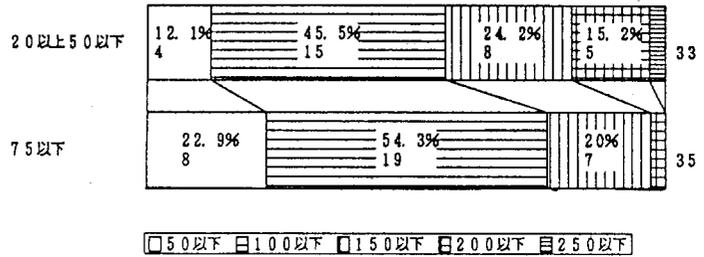


表 27 母の高さ と 知能

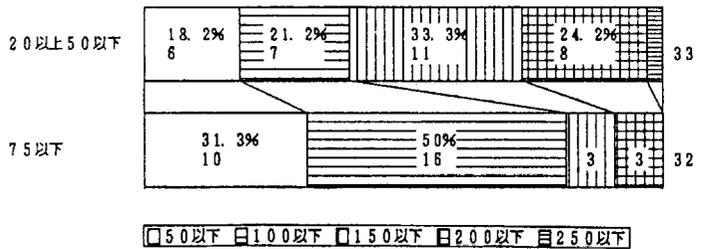


表 28 父の高さ と 知能

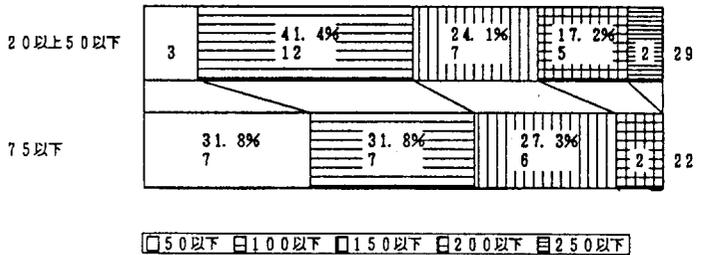
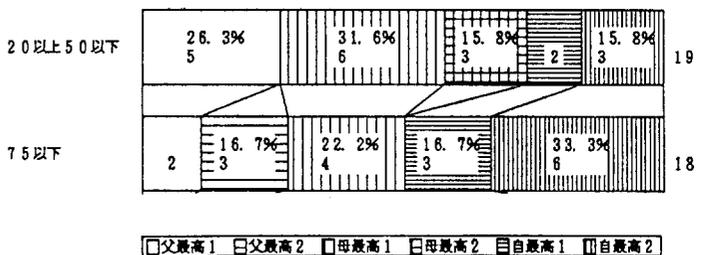


表 29 大きさの比較 と 知能



を最大に描く生徒が3割強、父を最高に描く生徒が3割弱となる。細かく見ると“母最高1”という自分<父<母の順に大きく描いている生徒が2割，“自最高2”という父<母<自分の順に大きく描く生徒が2割強，“父最高1”という自分<母<父の順に大きく描く生徒が2割弱となる。いずれにせよ父親が大きく描かれる割合は少ない。描かれた位置では父親は上に描かれることが多く、父親がリーダーシップを取っていると思っているが、父親に対する関心の度合いは低いということであろう。知的レベルで見えていくと、低い生徒は母親を最高に描く生徒が5割弱であり母親の存在の大きさを感じさせる。高い生徒は母親を最高に描く生徒が2割強、自分を最高に描く生徒が5割弱と、母親から離れて孤立していく様子

• 自分の位置 (表30)

自分が画用紙の何処に描かれているかをみたものである。

上下でみると中央に描かれたものが半数であった。左右でみると幾分左に描かれたものが多かった。

バウム・テストの幹の位置と、同様な位置に描かれており、内向的な傾向が感じられる。知的レベルで見ると高いレベルの生徒の方が上より下に、左より中央に多くなっている。低いレベルのほうは不安定になりやすく、積極的になれない傾向があるように考えられる。

• 父母との距離 (表31)

自分と父母とは接するように描かれることが多かった。特に母親とは約6割が接するように描かれた。不安定な気持ちを父母を側に描くことによって安定をはかっているようでもあり、側に居て欲しいという願いが出ているようでもある。

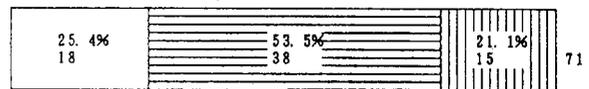
知的レベルが高い方が自分と父母との距離を取っている傾向が見られる。

2. 個別的にみた場合の所見 (事例分析)

①バウム・テストの事例

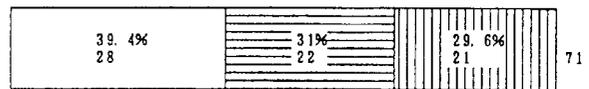
• 高等部1年男子A IQ 48 (全訂版田研・田中ビネー知能検査)

表30 自分の位置
上下



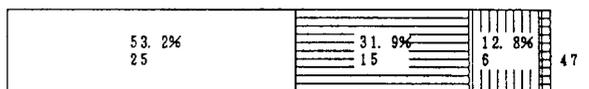
上 中 下

左右



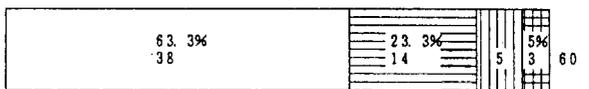
左 中 右

表31 父母との距離
父との距離



50以下 100以下 150以下 200以下 250以下

母との距離



50以下 100以下 150以下 200以下 250以下

Aは3600gで正常分娩で生まれた。始歩1歳6ヶ月、始語は遅かったが身体は丈夫、言語障害(きつ音)あり。家族は父、母、長兄、次兄の5人である。

Aは中学校を障害児学級で過ごしてきた生徒である。中学校3年の入学選考の時の母親面接で、“友達が皆他へ行ってしまうので、落ち込んでいる様子”という記録が残っている。長兄も本校の卒業生であるが、不安な気持ちであったのであろう。中学校の担任は“交友関係は広く、クラスの誰からも好かれる。ぐずぐずして、はっきりしない。身辺自立しているが、たまに大便を失敗する。”と調査書に記入している。入学選考の時の精神科医の所見は“自己意思を円滑かつ適切にできるように、指導強化。”となっている。

入学して、クラスの中のAの仕事は、朝の会の司会となった。まず出席をとる。声が小さいのでなかなか返事してもらえない。その後、今日の天気、今日の時間割り、今日の献立……というように司会をして、係の生徒に発表してもらう。横に立っている担任さえなかなか聞き取りにくい、なんとかやっている。声が小さいことを指摘するのは教師ぐらいである。いつもは下を向いていることの多いAであるが役割を果たしている。Aの表情が良くなった時は友達とのふざけて、また能力の高いBが遅刻をして指導されている時であった。

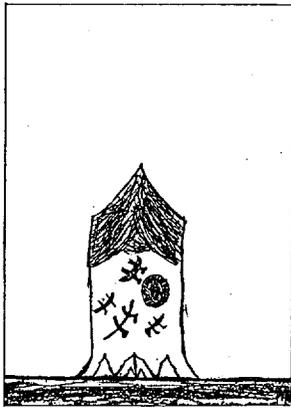


図1

図1は4月末にAが描いたバウムである。友達が気になったのかなかなか描けず描いては消してしまっていた。一人になってから左手で絵を隠しながらであるが、丁寧に描いた。完成まで50分の時間をかけた。絵が好きだと聞いていたが、よく描けたと思った。

「おわり」と言って、渡されたAのバウムは、黒く塗られた大地と鋭く切断された幹、丁寧に描かれた幹の傷が迫ってくるような感じである。しかも黒く塗られた大地より幹の基部が浮き上がり幹は空洞のように見える。自分が立っている所は不安定であり、また爪先立ちをしているような状態なのだろうか。実体の感じられない自分自身なのであろうか。外の世界とのトラブルも多く、鋭く切断された幹、切断された尖った部分にもエネルギーを傾けている。外界に対する思いも強いようである。外界にたいして敵意を感じ身構えているのだろうか。Aは意識していないであろうが、丁寧にしっかり描いたためにAの危うさ厳しさを余計に感じる。

入学以来各教科では自己表現力の向上を図り、物事に対して積極的に取り組む姿勢が課題としてあげられ指導がなされてきた。その後、表情も幾分明るくなり友達同士の会話では大きな声が出てきている。

左の図2の絵はAの1学期終わりのバウムである。K-F-Dを拒否していたが、もうそろそろ応じてくれるのではないかと思い聞いてみたが、やはり拒否され、バウムならということで描いたものである。20分かけた。大地は黒く塗られているが、その上に太い木が立っている。

4月の木とはちがい、T型のバナナの木が上に少しはみ出し気味であるが左寄りに描かれている。切

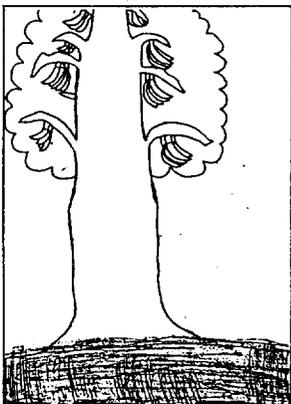


図2

断されてはいたが強烈なエネルギーが今回は上に真っ直ぐ伸び枝を伸ばし実をつけさせている。未分化で幹の伸び方は少し不自然さを感じるが自己を発揮し始めたところであろう。家庭の問題等Aを取り囲む環境は変わらないが、浮いたような不安定さでなく、しっかり大地に根を下ろし伸び始めている。しかし、自分に与えられた生活空間の認識が不十分でおさまりきれなくなってしまう。ある意味ではエネルギーがあり外界に対しても弾力性が出てきているが、枝は垂れ下がり枝の形からもまだ外界にストレートに係わっていけないようである。

Aは意思交換の面では劣り会話の成り立ちにくい生徒であるが、バウム・テストは彼を良く語ってくれた。

②動的家族描画の事例

・高等部1年男子C IQ76（全訂版田研・田中ビネー知能検査）

Cは2450gで自宅での自然分娩である。母、3人の兄弟の5人家族であるが、上の兄2人と姉は別世帯になっている。父はCが中学2年の8月に亡くなっている。母親の能力の低さもあったのではないと思われるが、発育は悪く離乳もうまくいかず病院に入院していることが多かった。始歩1歳6ヶ月、始語3歳2ヶ月で、その後の発育も良くなかった。癲癇発作があり投薬中。父の死後生活保護を受けている。中学校より障害児学級に在籍。Cの進路について面倒をみたのは長兄の内縁の妻で、食事等も兄の家で取っていたが、高等部入学後の担任の指導で家で食べるようになっていた。本校では能力も高く活動的な所もあるが、暗い感じで投げやりな感じがする。

図3はその様なCの生活がよく現れている。家族というよりは家であり、家具類が多く描かれている。「お母さんが寝ているところ、僕が勉強しているところ」とCは説明している。当時Cは「兄の家で食事を取り、帰宅途中で銭湯に寄り家には11～12時頃に帰宅する」という生活をしていた。そのような状況の中でCはこのような場面を選んだのである。泣いているような母を布団で区分し、自分は小さく背を向けているということは、母との間に感情的にも隔たりの大きいことが、感じられる。自分も左上に小さく描き、存在が危うい感じである。母に対しては否定的であるが、他人に対しては決して母の悪口を言わない、というCの思いが現れているようである。



図3

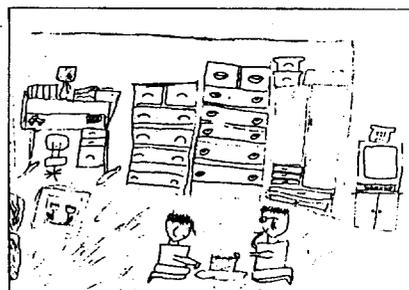


図4

図4は半年後のものである。個別に描いたもので、考えたあげく、描けないと言いつつ部屋を描き一つ一つ説明してくれた。「お父さんが死んだ所」（仏壇であることが後で判る）という説明が、教師に理解できなかったことから父親が亡くなった事を話してくれた。その話の後「お父さんがいた頃のこともいい？」と言い、頷くと、父親が亡くなった頃の事を詳しく話しながら「お父さんと自分が将棋をしているところ」を20分かけて描いた。将棋の台をまず描き、父を描いた。何度も描き直し、自分を描き、そして家具を描いた。2人とも横顔であるが中央に描かれ、自分は

しっかりとした線で描かれた部分もあり、前回より大きく描かれている。家具も付け足しになった。記録によると父親はCに対して暴力的であったというのが、大人になっていこうとするCにとって、父親の存在が大きな意味を持ち、父の死をまだ乗り越えられずにいるCの心情は、一種の厳しさを感じた。

V まとめと今後の課題

1. まとめ

(1) バウム・テストについて

①チェックリストからみられる精神発達遅滞児の主な傾向

- ・描き直しが多く、自信のない様子が見られる。
- ・外界に対する関心は低く、感受性が強い。
- ・自分の与えられた空間に収まりきれず、生活に対する積極的な態度がみられる反面、逸脱行動を示しやすい。特に高いレベルの生徒にこの傾向が見られる。
- ・被影響性が高く、内的弱さが見られる。低いレベルの生徒に不安定さが見られる。
- ・高いレベルの生徒に自我肥大、低いレベルの生徒に自我縮小が多い。
- ・その人を取り囲んでいる現実を限定できず、問題を未解決にほうっておきやすい。
- ・外界に係わって行けずにいる傾向が見られる。高いレベルの生徒は外界に係わって行こうとしているが、自信が持てないでいる。敵意を感じていると思われる生徒もいる。
- ・活動的であるが、型にはまった、月並みな行動が多い。自分を十分に出していない。
- ・結果のみを期待し、早急に成功・成就させたい気持ちが多くみられる。
- ・自己喪失感が感じられる生徒も見られた。

②事例から

精神発達遅滞児にとってのバウム・テストは、事例のAの意思表示が5歳レベルであり言語能力は低いAの心理状態を豊かに表出していた。クラスでの行動観察ではAの自信のなさ、不安な様子がとらえられた。この背景はバウム・テストを見ていくことにより家族関係等Aの生活基盤に対するAの不安が推測された。又、Aのこれまでの体験に何か強烈な外傷体験があったのではないかと考えられる等、Aを理解していくための、いろいろな情報が提供された。このようなAの内面を理解して指導のでだてとしていくことができる、ということは、精神発達遅滞児にとってのバウム・テストが、彼らの心理状態を豊かに表出していることであり、有効であると思われる。

(2) 動的家族描画について

①チェックリストからみられる精神発達遅滞児の主な傾向

- ・家族を切り離そうとする孤立した傾向がみられる。中程度のレベルの生徒が中でも孤立しやすい傾向が見られる。

描かれた場面は家族団欒が多い。しかし、食べるという生理的欲求に不安を感じている生徒も見られ、寝ているというような家族との係わりを拒否しているもの、立っているという自己防衛的なものも見られた。

- ・人物の描き直しが多く、自分、父、母についての葛藤が見られる。

・人物に耳の省略が多く、指示されることや否定されることの経験の積み重ねが、聞くことの拒否につながっていると考えられる。

・家族のリーダーは父母と考えているように見られる。

・父母を自分の近くに大きく描き（特に母親）関心の高さが見られる。高いレベルの生徒は自分、父母を小さく描き、父母との距離も離れて描く傾向がみられる。高等部の精神発達遅滞児にとって母の存在は大きいと考えられる。又高いレベルの生徒は父母からの自立の方向も感じられるが自分についての拒否感や葛藤も多く見られる。

②事例から

精神発達遅滞児の動的家族描画は、その時の彼らの家族に対する見方や思いが示された。動的家族描画はバウム・テストに比して現実的であるためか、描くことに対しての抵抗が大きく、拒否もあった。しかし逆に、彼らと描かれた描画について話し合うと、話が広がり、Cの亡くなった父親に対する思い等、普段ではなかなか理解できなかったCの思いが表出され理解が進んだり、教師との信頼が深まったりした。動的家族描画は卒業後も彼らの生活基盤となっていく家庭に対して彼らがどのような思いでいるか、一人ひとりの微妙な思いが表出された。そして、これが生徒理解のための有用な方法と思われた。

2. 今後の課題

精神発達遅滞児にとって、バウム・テストと動的家族描画の特徴と有効性は確かめられた。

描画を通して語られた、精神発達遅滞児の一人ひとりの心理状態に応じて教師がどう関わっていくかが、教師にとって重要な課題である。その意味からも事例については、長期の継続的な係わりと行動観察等多面的な係わりの中で研究する必要がある。

またチェックリストからの分析については、今回の研究は、精神発達遅滞児という観点からではなく、一般的な観点からみていったため、否定的な傾向も多く見られた。これは日頃精神発達遅滞児が否定的な見方をされやすいこととつながっており、彼らが自己否定的になっていることともつながっているように思われる。チェックリストから得られた精神発達遅滞児の一般的な傾向は、事例を見ていくことで、生の彼らの心理状態がみられ、“単に逸脱行動、自我肥大”ということではないことがとらえられた。精神発達遅滞児の心理状態を分析するためにはさらに分析を深め、精神発達遅滞児の、チェックリストの項目を設定していくことが今後の課題となる。

おわりに

この研究を通し、精神発達遅滞児の教育には、授業以外の自由な場面での係わりの大事さ、また言語表現以外の多様な表現（描画表現を含めて）の重要性を改めて認識させられた。

本研究をすすめるにあたって、横浜国立大学助教授岡田守弘先生、川崎市立南原小学校校長白井節夫先生、川崎市立浅田小学校校長丸山義王先生にご指導をいただき、心よりお礼申し上げます。

また、本研究にご協力くださった学校の校長先生はじめ諸先生方に厚くお礼申し上げます。

参考文献

- | | | |
|-----------------------------------|-------------------|-------|
| C. コッホ「バウム・テスト」 | 日本文化科学社 | 1970年 |
| 林勝造・一谷疆・国吉政一「バウム・テストの臨床的研究」 | 日本文化科学社 | 1973年 |
| 林勝造・一谷疆・国吉政一「バウム・テストの事例解釈法」 | 日本文化科学社 | 1980年 |
| 一谷疆他「バウム・テスト整理表の作成とその具体的利用」 | 京都教育大学研究紀要 No. 61 | 1982年 |
| S. H. カウフマン・R. C. バアンズ「子どもの家族画診断」 | 黎明書房 | 1975年 |
| 日比裕泰「動的家族描法」 | ナカニシヤ出版 | 1986年 |
| 岩井寛「子どもの心理と教育」 | 日本文化科学社 | 1981年 |
| 家族画研究会「臨床描画研究Ⅰ」 | 金剛出版 | 1986年 |
| 徳田良仁「アートセラピー」 | 日本文化科学社 | 1988年 |
| 扇田博元「絵による児童診断ハンドブック」 | 黎明書房 | 年 |

指導助言者

- 横浜国立大学助教授（専門員）岡田 守弘
川崎市立南原小学校長 白井 節夫
川崎市立浅田小学校長 丸山 義王
川崎市総合教育センター指導主事 吉岡 節子
川崎市総合教育センター指導主事 片山世紀雄